

奈良高専 図書館だより

No. 16

記事

〔読書感想文特集号〕

- 読書感想文コンクール
奈良高専に学校賞
入選作品（8編）
- 人権コーナー設置に当って
同和教育推進委員会
- 読書週間の催し 図書室

1984年1月 奈良工業高等専門学校 発行

昭和58年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会
国語科

毎年恒例の、夏休み課題図書（4年生以上は自由選択）の読書感想文コンクールは、今回で8回めになります。国語科と図書館委員会（8名）の教官とで慎重に審査した結果、次に掲げる8名の諸君の作品を、優秀作として選出しました。氏名をここに紹介して、努力をたたえたいと思います。

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 E 藤野富美（太郎物語） | 1 C 磯島喜生（西部戦線異状なし） |
| 2 MB 石原慎一（破戒） | 3 E 玉置 浩（太郎物語） |
| 3 C 定垂由美（黒い雨） | 3 C 中村 剛（破戒） |
| 4 MA 藤丸良介（竜馬がゆく） | 4 C 中森紀子（太郎物語 大学編） |

なお、角川文化振興財団主催「読書感想文全国コンクール」の「奈良県コンクール」（奈良新聞社共催）の高校部門で1 E藤野さんが優秀賞、一般部門で4 MA藤丸君、4 C馬場君がそれぞれ優秀賞を受賞しました。その栄誉をたたえます。

そのほかに校内コンクールで、佳作として選ばれた諸君は次のとおりです。

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|
| 1 MA 上村篤司 | 1 MA 小橋秀行 | 1 MB 会田謙次 | 1 MB 田垣内乾二 | 1 E 大石 明 |
| 1 C 板倉宏和 | 2 MA 金田謙治 | 2 MA 宮本秀樹 | 2 MB 田仲健一 | 2 E 西山英之 |
| 2 E 平田好充 | 2 C 初瀬川裕宏 | 2 C 山中良子 | 3 MA 水口庄吾 | 3 MB 辰巳耕司 |
| 3 E 斎田 茂 | 3 E 福山進二郎 | 3 C 字廻祥宏 | 4 MA 濱荻健司 | 4 MB 石尾博明 |
| 4 MB 岡西昌之 | 4 E 大林茂樹 | 4 E 柴田大輔 | 4 C 馬場 進 | |

文庫による読書感想文コンクール 奈良高専に学校賞

角川文化振興財団主催の「文庫による読書感想文コンクール」の「学校賞」が本校に与えられました。これは12月17日にコンクールの事務局から通知がありました。それによりますと、今回の第5回コンクールには、全国の中学校961校、高等学校1291校、計2252校の中から100校が選ばれることになっています。本校はこのコンクールに第1回から参加しており、また提出作品数の点からもその実績が認められたものと思われます。「学校賞」には記念品として角川書店版辞典25冊と賞状が贈られます。

この学校としての栄誉を諸君とともに喜び、さらに読書の習慣を学校全体のものにしたいたいものです。今後ともよりいっそう図書館に親しみ、利用して下さることを心から期待しています。



太郎との出会い

—太郎物語を読んで—

1年E組 藤野 富美

この夏、私は山本太郎に出会った。中学を卒業して私自身の大きな選択を終えたこの時期、私の新たな前進を始めたこの時期に太郎に出会って良かったと思う。それはさわやかで印象的な出会いだった。

太郎は一見平凡そうで実はなかなかしっかりした少年である。確かに一般の高校生とは違う。あの若者特有のすぐにカッとする事もなく、冷静に鋭く物を見ている。私からは随分冷たくも見えた。が、じっくり考えてみると、考え方や行動の筋がきちんと通っているから不思議なものである。

両親にしてもそうだ。彼を一人前として扱うあまり、世間一般の親のタイプからはかけ離れてしまっている。友達のようにざっくばらん、それでいてさりげなく見守っている。太郎が悩んでいてもかまってやらない。母親でさえ、

「自分の事は自分で解決しなさい。こっちだって忙しいんだからね。」

と言う。常に太郎と一定の距離を持ち、つかず離れず。それでいて彼らはとてもうまく親子関係をやっている。

父親は大学教授、母親は翻訳家である。それだけにそういう人々の持つ教養や人間的な深いものが自然に生活に溶けこんでいる。そして二人は自分なりのペースで生きている。自分の信念に沿ってまっすぐに生きている。

そんな両親の姿を見て学びながら太郎は育っている。そして知らず知らずの間にそれを身につけている。が、太郎も素直で頭の鋭い子だったに違いない。頭の鈍い子ならそんな親を見抜けないだろうし、頑固だと曲がって育つかも知れない。でも太郎は心温かさや知性のある心を立派に受け継いだ。

だから太郎も両親と同様、見栄も張らないし体裁も飾らない。人の流れに左右されず、自分が納得した信念に基づいて生きていこうとしている。どっしりとした目で世界を見、人には頼らない。自分自身がしっかりして強い。だから太郎は冷静でいられるのだろう。そして真実を見つめていく、さわやかに鋭く…。

ブルジョアで世間体を気にする親に育てられた藤原家の子供たちは「親への復讐」を企てる。無理心中や学生運動で親の体面を壊そうというのである。そして比較的冷静なその次男と太郎は友達である。また素子という太郎の女友達も父親が失業し、学校をやめて働く、でも太郎は彼らにお節介なんかしない。じっくり話を聞いて自分なりに随分考えてははっきり意見を言う。それでも直接手は貸さない。彼ら自身の力で立ち上がっていくのを見守っているだけである。それが私には冷たく見えたのだが、考えてみると最善の方法のように思われる。必要以上に何かと人にかまわれるのもいい気分ではないし、いつも人の力を頼りにするようでは困る。未永くいい関係でいるには、こういった態度が重要ではないだろうか、親子も他人、という山本家の考え方には少し寂しい気もする。しかしその考え方は常に相手の人格を大切にしているのであり、人間の健全な自立に対する深い信頼の上に成り立っているのである。そしてこれが太郎をあんなにもたくましくさわやかに育てたのであろう。こう思うと、あらためて太郎の両親の素晴らしさを感じないではいられない。しかし、今は乱れた世の中である。正しいものが必ずしも通るとは限らないし、実のない名ばかりの物が行き交っている。そんな時代によくこれだけしっかりと物事を見つめていけるものだと思う。私もこういう事を見い出せる人に憧れている。

この夏、私は山本太郎に出会った。そして生きていく上で確かな姿勢を私に示してくれた。自分をしっかり持つ事を教えてくれた。今度は私をもっと社会や人間を見られるようになった時、太郎と再会しようと思う。その時、私はどんな太郎に出会うのだろうか。そして私はその太郎にますます魅かれていくのだろうか、それとも今ほどに共鳴しないがっかりしてしまうのだろうか。それは今の私には分からない。しかし、太郎と再会すればその中に新鮮な発見がどんな形にせよきっとあるに違いない。それは私が自分なりに前向きな姿勢で生きていき、太郎と出会い続けていく限り絶えるはずのないものであるだろう。

この夏の太郎との出会いはこうして未永く続くようである。

「西部戦線異常なし」を読んで

1C 磯島喜生

「……僕らは危険な獣になってしまった。僕らは戦うのではなくして、皆殺しに対して防禦するのである。」

僕らは爆弾を人間に向けて投げたのではない。死が鉄かぶとをかぶり両手を挙げて、僕らの背後から駆り立てるといふ瞬間に何を考えていられるものか。」

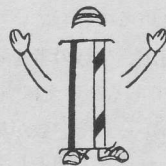
これはこの本の一節である。私は文学が戦争というものをもどう見ているかを知りたくてこの本を読んだ。もともと私は戦争に使用される武器をながめたり、調べたりすることが好きである。世間の人はそんなことをする人間イコール戦争をするのが好きな人間と決めつけたがるようだが、私はかえって逆だと思う。兵器の威力を知っているからこそ戦争のこわさ、戦争の惨酷さ、また戦争を起してはならない理由を普通の人よりも深く考えられると思う。

戦争は惨酷なものだということ誰にでもわかることだが、それがどう惨酷なのかを知らないし、また実際に体験した人も少ない。だから戦争反対という声もなんとなく漠然とした、単なる政府や超大国や、国連などの個人をはるかに超えた巨大なものに対しての手前勝手な要求の声としか私にはとれない。それはなぜなのか。私の考えでは、戦争の実態を知っている人が少なすぎるのであり、また争いが一触即発の危機に面しているというのに、その戦争の悲惨さを知らないことを恥じようともしないからだ。そんな人たちこそ、この本を読んでもらいたいと思う。

この本は第一次世界大戦を舞台としていて、確かに古風な面も多いが戦争のもつ惨酷さの本質は鋭く表されている。最前線の、しかし兵隊の中では一番下の階級の兵卒を主人公にしていて、いかにも作者がその場で見えてきたように書いてある。民家からアヒルを頂戴してきて秘かに焼いて食べるその幸福感、いやな下士官を酔って帰ってくるのを待ちぶせて皆でやっつけたときの楽しさ。そんなことを現実のこのように書いてある。腹いっぱい食べることと、ぐっすり寝ることだけが兵隊稼業の中で最も楽しいことのようにも思える。しかし、そんな彼らにも戦争にもどったときは人間ではない。「危険な獣」となって殺し合うのだ。いや、主人公パウロ・ボイメルの言うように、死が自分の背後から近づいてくるのに、何か考えていたら自分が殺されてしまうのだ。つまり相手を殺さなければ自分が殺されてしまう。個人個人が悪いわけではない。戦争そのものがそうさせるのである。だから戦争を起してはならないのである。また、私が中学時代に読んで書名も忘れてしまったが、この一言だけは鮮明に覚えている。「殺さなければ殺されてしまう。まっさきに殺して生き残った方が正義なのさ。」と。西部戦線の主人公たちが討論している中にも戦争がなぜ始まるのか議論する場面があったが、結局結論がでなかつ

た。彼らこそ、その結論によって真っ先に救われなければならないのだ。

この本は私から見れば、戦争の現実を知るのに最もよいと思った。現在核ミサイルも発達し、一台の推進機に三つから五つも弾頭をつけたものや、潜水艦から発射できるSLBM、地中奥深くから発射するICBM、IRBM、空中発射のARBMなどの一連の核ミサイル群、また宇宙空間を飛んでいる人工衛星を撃ち落とすASAT。ミサイルだけでも数えきれないほどの種類だ。それらの兵器は妖しいまでの美しさを持っている。それは人殺しのために極限まで追求された悪魔の芸術品であるとも言える。それらを造る人々は何を考えながら造っているのだろうか。仕事なんだからと決して割り切れるものではないはずだ。この本に登場し、そしてはかなく散っていった兵士の何千、何万倍の人々を一瞬に気体のように消滅させる妖しい現代の獣たちよ。私はそれらが一度も血に染まることなくこの地球上から消えていってくれることを、この本を読んで心から願った。



「破戒」を読んで

機械工学科 二年 石原 慎 一

この破戒という作品を読んで強く感じたことは、差別されている人間の生き方の違いということだ。もちろん、差別の恐ろしさ、差別される者の苦しみということについても強く印象に残っている。

差別されている人間の生き方の違いとは、二人の人物、瀬川丑松と猪子運太郎が対照的な生き方をしていることである。丑松という人物は、部落出身ということのを隠すために、常に神経をとがらせ、自分の身分を思えば思うほど、深刻に悩み、自分の未来を悲観し、とことんまで、自分自身を卑下して、自分という存在をも否定しようとしていた。それに比べて、運太郎という人物は、自分の身分を堂々と明かし、本を書くことによって、社会を相手に、命をも懸けて戦った。客観的に人権問題として考えてみれば、誰もが運太郎を尊敬するだろう。

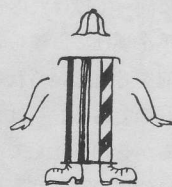
しかし丑松も注目すべき人物ではないだろうか。丑松は、部落差別というものと、戦わなかった、これは、

人間誰もが持つ弱みではないだろうか。誰でも差別され、孤立してしまうのは怖いに決まっている。それに加えて、父の息子を思うがために、戒を破るなど、死ぬまぎわまで言い続けたことを、そう簡単に破るわけにはいかなかったであろう。丑松が必死に身分を隠そうと苦悩したことこそ、人間の弱みなのである。作者藤村は、そこに人間らしいところをみて書こうとしたのであろう。差別される人間の心の痛みを持っているからこそ丑松は、人に対して深い思いやりで接することができたのに違いない。その結果として、丑松が身分を明かした後でも銀之助、お志保や生徒達が、丑松に対しての信頼を失わなかったのは、この作品のせめてもの救いであるように思える。しかし彼らは個人的な善意にとどまっておらず、差別と戦う人達ではなかった。丑松も蓮太郎の意志を継がなかった。

やはりこの作品は、身分差別という人間の醜い点を描いた部分が多かったと思う。差別というものは、多くの人々が偏見を自覚せずに、当然のように行なっているように感じる。悪いことをしている時に、これは悪いことだと自覚しているのとしていないのでは大きな違いだ。大多数の者が、少数の者を不当に蔑視することが差別だ。大多数であるがゆえに当然ようになる。言わば大多数であるからこそ、数が集まっているからこそできるのだ。これこそ人間として最も恥ずべき行為なのではないだろうか。一人の人間を破壊し、社会からしめ出すのに最も卑劣な方法、それが差別である。

こういうことが何故当然のことのように行なわれているのか。その一つの理由として、差別している人間は、丑松のような差別されている人間の辛さや苦しさを全く知らないということにある。だから自分自身に「おまえは差別したことはないかと問うとしたら、決してない」とは答えられない。どこかで気づかないうちに差別をしていたと思う。今になって考えてみれば、悪いことだと自覚できる。だがその場その時は、悪いことをしているとは思っていなかったに違いない。相手の立場になっていれば絶対にしていなかっただろう。相手の立場になるということぐらい難しいことはない。これをできる人間があまりにも少ないために差別というものが存在しているに違いない。

この作品によって教えられたこと——差別の恐ろしさ、差別されている者の苦しみ、差別に負けた人間、差別に負けまいと戦った人間の生きざま——そのどれをとっても考えなければならぬことばかりである。この教えられたことは絶対に忘れてはならない。すべての人々が人間らしく生きるための原点として、自分の心に深く刻んでおくつもりだ。



「太郎物語（高校編）」を読んで

電気工学科 三年 玉置 浩

「この作品は『太郎物語』として昭和48年7月新潮社より刊行された。」と最後の方に書いてある。けっこう新しい作品なんだな。「高校二年の山本太郎は・・・」という書き出しで始まる第一章を読み始めて僕は、学生帽をビシッとかぶり、つめえりの学生服が一番上のボタンまでキチッととめて、まっ黒な学生鞆だけを持って歩いている「太郎」君を想像したのだが、次の頁ではこの「太郎」君は銀行の中へ入って行き、そしてその次の頁では「クレジットカード」という言葉が出てきた。けっこう新しい作品なのである。

この「太郎」君、おもしろい若者である。頭の回転もなかなか速いようである。両親もわりとくだけた感じの人で、親子揃ってユーモアのきいた会話をくり広げる。この「太郎」君、ごく普通の若者である。わき目もふらず一心不乱にある事に熱中しているという訳でもなく、かといって、生きる希望もなくシラけた眼差しで一生懸命に生きている人をバカにするという訳でもない。どこにでもいるようなごく普通の高校生である。

僕はこの「太郎」君のこと、とてもかっこいいと思った。どこがかっこいいかというと、自分の考えを持っているところである。例えば身上相談のシーンでは女の子が感情的になってきても「太郎」は冷静に自分の考えを述べる。「五月」さんも少し面くらった感じで、こんなはずじゃないのになあというように思ってくる。しかしそれでも「太郎」は冷静に、クールなほどに、血も涙もない人間みたいに、彼女達の意見に反対を唱える。僕は驚き、そして感心した。「太郎」君ならたぶんここで身上相談の彼女に同情して、そして彼女の問題をまるで自分のことのように悩み、友人の「黒谷久男」と一緒に右往左往するのかもしれないと思った。しかし「太郎」君はそういうことをしなかった。かっこいいと思うなあ。なかなかできることじゃない。こいつただ者じゃないぞ、とこのへんから僕はそう思い始めた。さっき彼のことをどこにでもいるような普通の若者と言った。訂正しよう。今時珍しいしっかりした

若者だと思う。僕は彼のことが一遍に好きになった。

自分の考えを持つということはいいいことであるが、実際には非常に苦しいことだと思う。いつも自分の考えが正しいというわけではない。またこの現実の社会の中で、その考えが正しいと認められるかどうかもわからない。時には、自分の考え方がまちがっていることに気付いたり、周りの社会から認められないということもある。そのために傷ついたり、腹を立てたり、挫折したりすることもあるだろう。「太郎」君もこの本の中で、悩んだり、失望したり、落ち込んだりしている。どうして若者はこんなにまで、悩んだり、考え込んだりするのでしょうか。青春とはつらく厳しいものである。「太郎」君はこう思う。「青春が輝いたものなど書けるのは、それだけでその人が既に青春を終った人である証拠ではないか」と。

やがて、ふと周りを見渡すと、みんな少しずつ変わってきているのに気付く。「五月」さんも「藤原」君もみんな少しずつ変わってきている。いろいろな事件が起こって、いろんなことに悩んだりして、ふと立ち止まるとみんな少しずつ成長しているのに気付く。「太郎」君も少しずつ成長している。青春なんだから、成長するのが当たり前だ。いやだと言っても時の流れは止まることがない。こんなふうにして大人になっていくのだろうか。

もう一度「太郎」君に会ってみたいと思った。「大学編」の方も読んでみたいと思う。

「黒い雨」を読んで

化学工学科 三年 定 亜由美

この本を読んで、まず最初に何とも言えない憤りを感じた。そしてこの恐ろしい歴史上の事件が、人間の手によって行われたという事実を通して、私は今一度、人間というものを考えてみた。

昭和20年8月6日、広島に原爆が落とされた。当時の人はもちろん、それがどんなものであるかはわからない。しかし、一瞬のうちの鋭い光と、激しい爆音の後に残された焼け野原と、人間らしさを失ってしまった死体の山を見て、その爆弾がただものでなかったことを知る。

この本の主人公である、閑間重松もまた原爆によって負傷した一人である。彼の姪の矢須子もまた被爆しているというあらぬ噂をたてられたため、縁遠くなったのを見かねて、重松は当時の日記を元に、彼女は全く原爆とは関係がなかったのだと証明してやる。重松

にとったら必死な気持ちであっただろう。まだまだ若い彼女には、これからの人生を、大きな夢と希望を持って、どんな風にも生きていける可能性があるのだから、そんなつまらない噂で彼女の将来を、台無しにしてやりたくはないだろう、しかし「被爆日記」と名づけられたその日記を清書し終る頃、重松は、矢須子が原爆投下後の黒い雨によって、自分よりももっとひどい原爆病にかかっていたことを知る。

重松の妻であるシゲコは、矢須子が、実は自分が原爆病であることを知りながら、隠していたことを大変悔しがる。しかし、私は同じ女性として、矢須子の気持ちがわかるような気がする。原爆病によってどんどん体が悪化していくという恐怖より、自分がどんどん醜くなっていくことに対する羞恥心の方が大きいのは、若い女性として当たり前だと思う。いや女性に限らず男性だってそうだろう。年寄も、子供も、誰だってそんな姿の自分を見られるのはつらいことだ。人々は街に転がっている死体のことを考えたはずだ。いくら死んだとはいえ、醜い姿の自分が人々の目にさらされて、虫けらのように燃やされているところを想像するのは、耐え難いことだろう。

このように、平凡な庶民の感情と生活を踏みにじり、将来性の豊かな人々の人生を狂わせた加害者の行為が私には許せないのだ。そこまでする必要はあったのだろうか。戦争というものは、ここまで人間らしく生きることを困難にさせるのだろうか。そして人間の心というのは、時と場合によってこんなにもすさみ、情けないものになるのだろうか。原爆を落としたアメリカ人だってやはり、美しく生きたいと要望したのだら私は思うのである。人間らしく生きたいと思うこの気持ちは、日本人もアメリカ人も同じだと思う。この両者がいがみ合う理由はどこにもなかったのである。

私は何度もこの本を放り出したくなった。荒れ狂った広島街や人々の描写は、読むにたえられなかった。しかし同じ人間のした過ちを、ひとつひとつ知るためにも思い切って読み通した。そして読み終った今は、私たちが、何の不安や恐れも抱くこともなく、普通に生きていられることをありがたく思い、この平和を、いつまでも守り続けなければならないと痛感している。

「破戒」を読んで

化学工学科 三年 中 村 剛

この小説では、三つの相異なった人間像が描かれて

いる。部落出身であるが故に社会から放逐されるのが怖くて、父の戒め通りに素性を隠す丑松。同じく部落出身でありながら自ら素性を明かし、部落差別の非合理性を著述によって訴え続ける蓮太郎。そして、士族の出身でありながら維新後の四民平等化によって零落し、貧苦に追われて人生を悲観する敬之進。この三つの姿である。この三人の年齢や職業こそ異なるが、世間の冷たさを十分に味わった、下層社会を代表する人々である。この三人の姿は、後に、明治初期の身分差別のひどさを改めて教えてくれ、現代にもなお残る部落差別に激しい憎悪を抱かせた。

僕は最初、丑松は部落出身であるということから戦う人を期待した。しかし当時の、「新平民」とよばれた人たちの中では、教師という最も恵まれた境遇にあったことと、の中で彼のとった行動とを考え合わせると、苛立たしささえ感じた。なぜ、彼は蓮太郎という大先輩にまで素性を隠したのだろうか。いや、飽くまで隠すつもりはなかったのだ。彼の素性が暴露されかけた時、彼は死か告白かの選択に迫られ、死を決心し、死ぬ前に先輩にだけは告白しようと思った。しかし、その時はもう、蓮太郎は帰らぬ人となっていた。そして、彼は初めて自分で自分を欺いていたことに気づき、社会に対し告白する決心をしたのだ。僕は、彼がようやく部落解放運動を興すつもりになったのだと思い、期待して読み進んだが、実際に彼のとった行動は、なんと逃避的であったことか。僕は彼に憤りさえ感じた。彼は生徒の前で土下座して、「私は卑賤しい穢多の一人です。」「不浄な人間です」「今日までのことはどうか許して下さい」と、言うではないか。これでは、自分で差別を肯定しているようなものだ。なぜ、「私は、君たちと同じ人間だ。」と言えなかったのだろうか。彼は自分の素性を明かしてしまうと、日本を捨てて、テキサスへ旅立ってしまった。なんとという無責任な男なのだろう。結局、丑松は、教育を受け、教師の地位にまでつきながら、「新平民」と呼ばれた人たちのために何もしなかったのだ。この点は蓮太郎との大きな違いである。

丑松がどんな性格の青年であろうと、差別が彼を死の決心にまで追いこんだのは事実である。そこで、改めて部落問題について考えてみた。部落は封建時代の政治権力によってつくられたのが出発点であるから、その問題の解決は、政治が担うべきである。また、部落差別は、憲法に保障された基本的人権の侵害につながる問題である。従って、真の民主主義を掲げる我が国の政治体制では、部落差別は、まず政治の重要な問題である。しかし、実際に差別をしているのは我々一

人一人なのだから、政治任せにしておくだけではいけない。国民の一人一人が自分の課題として取りくまなければいけないと思う。

では、一体、自分はどうすればよいか。自分は今まで種々の差別事件を聞いても、「世間にはそのような差別をする不合理な人間もいるものだ」ぐらいに考えて、ひとごとですましていた。しかし、同和教育の進んだ現在、差別が良いことだなんて考えている人はいるはずもない。それなのに、差別事件の絶えないのが実情である。そうだとすると、差別は悪だと、観念的に理解しているだけでは、いつ自分も差別する側に立つかわからないのだ。自分が正しいと判断したことに世間の目を気にする必要はない。僕は、この「破戒」を読んで、絶対に部落差別はしないと決心した。差別を許してはならないと思った。もし身近かなところで、差別を見つけたら、とことん抗議しようと思う。



「竜馬がゆく」を読んで 一夢を追う者一

4 MA 25番 藤丸良介

幕末、多くの人々が夢の途中で死んだ。年若く、自分の選んだ道を買って死んでいった。この混乱の中を竜馬は駆け抜けた。日本の進むべき道を示し日本を変えようとして、わずかに三十三歳でこの世を去った。

彼を思う時、自分の本当の夢を成就できなかった彼の無念が、僕の胸をいっぱいにする。彼にとって、薩長同盟を成立させたことも、第二次幕長戦争で海援隊を率いて幕府軍を敗走させたことも、大政奉還を建議し、これを成立させたことも、自分の進む道の上の障害物を取り除いただけにすぎない。それゆえ彼の最後には、暗殺者と無情な天に対しての憎しみと、行き場のない哀しみだけが残った。

彼を英雄として語ってはほしくない。いつの世も英雄は、花々しく活躍し、儂く散っていくものである。しかし、彼には夢を追いつける一人の男として、世界を舞台に駆けめぐってはほしかった。なぜなら、物質的な面では恵まれても、精神的な面で満たされない生活を送っている現在の僕には、彼のような夢を追う姿に、

憧れと希望を見つけ、限りなく共感するからである。

僕は19歳になったばかりである。しかし、自分の前途に確かな目標を見出すことが出来ずにいる。そればかりか「無気力」とか「しらけ」とかの名で大人たちから冷笑を受けても怒りの感情すら湧かない。物事すべてを冷めた目でしか見られなくなり、学問は勿論のこと、遊ぶことすらバカバカしくなってしまった。どんなに馬鹿騒ぎをしても、心は自分を冷めた目でじっと見つめている。こんな空虚な自分が恐かった。だから僕は、自分に生き甲斐を示してくれる人を探し求めてきた。しかし人はどんなに親密になっても、共感を深めても、他人の生き甲斐と一致することなど不可能であることにやっと気づいた。そして、それを見つけれられるのは自分しかない気づいたのだ。それならば、彼のように大きな夢を持とう。たとえ人になんと言われようと、自分自身を信じて、出来るだけの事はしてみようと思う。

竜馬曰く、「世の中の人は何とも言わば言え、我が成すこと我のみぞ知る。」

先のことなどわかりはしない。まして自分のわからないものが他人にわかるはずがない。だから人の言葉に左右される人間にだけはなりたくない。そして、自分の夢、自分の考えを持たない人の言葉を信じない。

再び竜馬曰く、「人みな善をなせば我ひとり悪をなせ。天下のことみな然りを云えり。」

右向け右の号令で誰もが右を向いている時、一人左を向いてもいいではないか。他人と同じことをして得るものはない。そこにあるのは同じ考えしか持たない大量生産されたロボットではないか。

我々は今日の社会に矛盾を感じていても、それを否定することさえもせず、ただ自己の欲求を満足させることのみで没頭しているだけではないか。いや、それどころか自分の欲求を満足させたことさえ、他人事のように冷めた目で見つめる人間が多くなっている。僕もその一人である。悲しく、哀れなことだと思う。

竜馬は日本の進む道を示し、日本を変えようとした。それを成さなければならぬのだと彼は思った。そして、それを天から与えられた自分の使命であるとした彼の意志は、時代や社会状況が異なる現在の我々に対して、力強く、はっきりと伝わってくる。人はそんな熱い想いがあってこそ生きているのだと思う。その想いがたとえ社会に対する反抗であろうと、時の流れにさからうことであろうと、そのために敗北しようとも、それを貫くことが人の存在する価値であると思う。

桂浜の竜馬の銅像は、彼の夢を追った海を見つめて立っている。彼は今の日本をどんな想いで見ているの

だろう。夢を失った人たちの日本を……。

新しい賢母

「太郎物語 大学編」を読んで

4C 中 森 紀 子

主人公山本太郎は私と同じ年頃の大学生である。太郎の心暖く自主的な生き方にあこがれた私は読んでいくうちに、この太郎のすばらしい成長を助けた両親、とくに母信子に強く心を引かれた。

一流大学の明倫大学と、二流と言われる地方の北川大学に両方とも入学できることになった太郎は、よく考えた上で後者の北川大学を選んだ。明倫は大学としての格は上でも、太郎が本当にやりたい講座がなかったからである。この決定を聞くと憧れのガールフレンドの千頭慶子はもったいないという顔をしたが、翻訳の内職に明け暮れている母親の信子は「賛成よ。」と言った。「私は、初めっから北川がいいと思ってた。」太郎は母親が、「北川でいい」と言わなかったところを記憶にとどめた。「北川でいい」というのは譲歩であり、「北川がいい」というのは息子の決定に対する積極的な賛同である。太郎は母のその温かい支持を素早く感じとったのである。

山本夫妻は息子に本気で勉強する気があることを見極めると、勉強がしやすいようにとマンションを買うことにした。男の子を甘やかしてそんなところに入ると、何をするかわかったものじゃないという伯母の非難に、信子は「私共の息子に限ってそういうことはないと思ってます。」「私たちは、息子に、これでも賭けているんです。普通のお宅のように、有名校に入ってもらいたいとか、大会社に就職させたい、ということじゃありませんけど、学問が好きなら、それを身につけさせるために、全力をあげたいんです。」と言う。一方では信子は太郎には「墮落したら、第1の責任は自分なのよ。」とダメを押すことも忘れないし、世間からよく思われようとするのがどんなに人間を縛り、人間性を貧しくするかと言うことを、友人の家を例に太郎に語ってやるのである。山本家には金があり余っているわけではない。大学教師の家で、母親が翻訳のアルバイトをしながらも700万円ものマンションを買うことは決して楽なことではないだろう。だが汗のしみた金を出すという親の好意と息子に賭けた信頼の深さを感じれば、太郎はもはや他人の期待に依って墮落してみせるわけにはいかないのである。

そして名古屋でのマンションぐらしが始まったわけ

であるが、しばらくして、異質の文化に出会っていささかたじろいだのか、新緑の頃に新入生を襲うという5月病にかかったのか、太郎が心なえて電話をかけてきた時には、信子は敏感にその気配を感じとり、「道をまちがえたと思うなら帰っておいで。出直したらいい。人間はみなまちがえるものなのだから、やってみて、まちがったと思ったら、あっさりカブトを脱いで出直したらいい。生きていく方法は何でもあるから」と言う。普通の親なら、せっかく大学に入ったのにか、高いマンションを買ったのに、そんなことでどうするのかと、励ますつもりで逆に息子を窮地に追いこ

むのだが、このあたり、信子の言葉は息子を甘やかさず、追いつめず、聡明な心理学者のように配慮が行き届いていると思われる。

子供を信じること。子供の自立性を尊重すること。お返しを期待せず、飛び去った後も子供の幸せを望み世間が何と言おうと、子供を支持し続けること、信子のとったこの態度は、強い意志の力と明るい理性に裏打ちされた愛があって初めて生きるものであろうが、私が母親になった時、太郎に対してとった信子の態度を見習って、子供を巣立たせたいと思っている。

人権問題について、新たにコーナーを設置するに当たって

同和教育推進委員会

すべての国民は、法の下に平等であって、人権・信条・性別・社会的身分、又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において差別されない。（憲法第14条）

憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられる。（憲法第11条）

このように日本国憲法にうたわれている平等の原則と人権尊重の精神は、人類社会の全ての構成員にも向けられ、世界人権宣言や国際人権規約などの中にも表わされている。これらは世界における自由、正義及び平和の基礎をなしているものである。

しかし現実には、私たちの生活の中に苦悩や憎悪の波が絶え間なく押し寄せてきている。そこには、必ず不合理や矛盾がひそんでおり、私たちがそれらの問題の背景や原因を追究せずに放置しておくならば不合理や矛盾は再生産され、さらに社会の中で拡大されて行くであろう。「本当のこと」を知ろうと努力せずして民主主義の確立はありえない。江戸時代の封建体制からつくり出された部落差別、軍国主義



（部落差別（部落解放新書7）p.141から）

義の犠牲となった在日朝鮮・韓国人問題など、現代社会にもろもろの差別が存在していることを忘れてはならない。まるで、人が人を差別するところに、苦悩や憎悪の暗い海ができてしまっているかのように入る。

「本当のこと」を知る努力をしてほしい。「本当のこと」を知って、人の気持ちや理解できる人間に成長する人が多くなれば、世の中に本当の正義が生まれ、自由と平和を熱望する差別のない社会が少しでも早く実現するであろうから。

「本当のこと」を知るために、図書館の人権問題資料コーナーをのぞいてみてほしい。設置されてまだ日が浅いため、質量ともにまだ不十分ではあるが、人権問題に関係した図書が並べられている。とつきにくいかも知れないが、「本当のこと」を知るための努力のワンステップを踏んでほしい。それが人権を尊重し、差別を許さない人間としての責務であろうと思うからです。

最後に、人権問題資料コーナーの設置に当り、図書館委員会及び図書室の御協力を得たことに感謝の意を表します。
(文責 幹事会)



図書室から

1983年のこの秋、図書室では恒例の読書週間の催しとして、上記・同和教育推進委員会に共賛して人権関係の書籍を展示する事にしました。新設コーナーを充実させる為にもプラスになると考えたからです。その心算で見ますと図書室にもかなり常備されている事が分りました。然し書籍ばかりで地味なものですから、果して学生諸君が興味をもって見に来てくれるか心配です。その上、高専祭と重なって益々分の悪い展示とならざるを得ません。が、読書週間が済んでから、気をつけて見ると、目立たないけれど、展示する以前よりも利用度が増えている事が分りました。

当初、地味な展示を幾らかでも魅力的なものにするには、とナイ智恵を絞って、人権、差別等を次の五つに分けて考えることとし、書籍や写真を集めました。

1. 人種問題……人種差別、といったら誰でも頭に浮かぶのは、アンネの日記や、アウシュヴィッツ等で知られるユダヤ人の事、又、アメリカは南北戦争の因となった皮膚が黒い、という事だけで奴隷にされた有色人種の事、国内ではいまだに南は沖縄、北はアイヌ、又、朝鮮・韓国人問題等々があります。
2. 部落問題……国内版のトップに上げられる最も身近な問題です。就職・結婚等、何の根拠もなしにまだに憲法が保障した権利から遠い人々がいるのは不当なことです。一番資料が多かったのは、それだけ切実だという事の現れでしょう。
3. 男女の差別……天の半分を担うのは女性であり、原始、女性は太陽であった、といわれながら、太古の昔から嬖天下以外、天下を取った事がないというのも不思議な事です。国際的、国内的、又、哲学、生物学、政治・社会・法律、文学等、あらゆる分野で問題にされていながら資料があるようでなかった分野です。
4. 身体障害者問題……五体健全でない、というだけで人間として生きる権利が保障されない、という法はありません。生きる、という点で健常者に追いつこうという努力は大変なものです。資料は少ないけれども、感動的な生きる記録につける、といってよいと思います。
5. 宗教の差別……自分と違った考え方に対して日本人は寛容でない、といわれています。過去に宗教戦争や、宗教裁判等の熾烈な闘いを経験しなかった、と思いがちですが、どうして、一向一揆や、近くは天理教の迫害史等、相当なものがあります。努力して集めなかったキライがありました。

以上のように、差別や人権の問題は、とても五つの分野だけに止りません。貴賤、貧富、好悪、地域、言語、容姿等々、気をつけてみると、差別というのはあらゆる所に転っていて、その事が平和に生きようとする人と人との間を離間させ、脅やかしている事に気が付きます。そういう事に一層気を付け、皆で考えて少しでも自分の心から差別意識を取り除く事を願って展示をし、更にコーナーを設置したのですから、図書室では出来るだけ沢山の学生諸君が利用される事を期待しています。又この事について意見や質問があったら何時でもお話しに来て下さい。教官も職員も出来るだけ諸君の疑問解決に努力したいと願っています。

尚又、この事についてアンケート箱を設置しますので、それを通じて御意見や質問をして下さっても結構です。その内、それについても図書館だよりで御報告したいと希望しています。

この号は、人権をもテーマにしています。そこで、奈良県高校同和教育研究会発行「人権作文集、ひとりひとりの願いを22集、1983.5」に掲載された、本校学生の作文「差別」を転載しましたので併せて読んで下さい。

「差別」

奈良高専機械工学科2年 金田 謙治

ぼくは、小学校から中学校までの九年間、「なかま」の道德の時間で差別に関するいろいろな講義を受けたり映画を見たりしてきた。

その中で特に印象に残っている映画がある。それは、廃品回収業を営む人々への差別を描いた職業差別の映画だった。

廃品を回収する人々に対して、子供達は偏見を抱いたりしないが、その親達は、子供達が、廃品回収業の人々に接するのを避けさせたり、子供達に、廃品回収業の人々が恐い人だとかいう、いろいろな偏見を植え込んだ。

この映画を見て、特に印象に残ったのは、人が人を差別するようなことになるきっかけだった。映画の場合も他のほとんどの場合も、親が子に差別心を植えつけるということだ。そして、差別心を持った子供は、友達の心に次々と、差別心を植えつけていく。

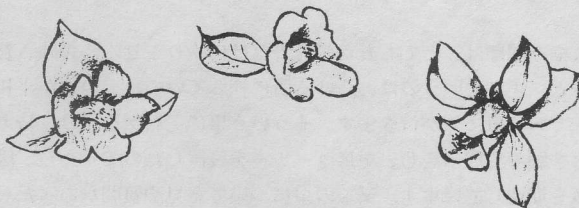
僕も小学校のころ、職業差別をしていた。学校の近くに、化学肥料を作る工場があった。その工場からは、牛を焼いているため、ひどい悪臭が漂ってきた。太陽の下で汗まみれになって働いている人を見て、僕達は、差別していた。中には、平気で、その工場をののしる者もいた。

しかし、そんな僕達の心を変える二つの出来事がおこった。

一つは銭湯に入っていた時のことだった。その工場で働いている人が銭湯に入ってきた。夏だったので、その人は、いつも上半身は下着一枚で働いていた。その人の体をよく見ると、太陽に照らされて仕事をしているので、首筋のあたりが、焼けて、真赤だった。その時に、仕事には、貴い仕事とか、卑しい仕事とかいうものはなく、精一杯仕事することが最も貴いことだと強く感じた。

もう一つは、凶工の時間、工場の様子を版画にするために、その工場に行った。いつも僕達はその工場を差別していたのに、工場の人たちはいやな顔をせず、様子をスケッチさせてくれ、おまけに、いろんなことを説明してくれた。この時に、この工場で働いている人達こそ最も立派な人だと思った。自分達が差別されているのを知りながら差別している僕達に文句一つ言わず、いろんなことを教えてくれた。

ぼくはこの経験で、差別をしない心を養うには、授業のような机上の学習だけより、日常、自分達が気づかないでしているどんな小さな差別でもいいから、それを見つけ出してそのことについて、話し合うことの方が、有益だと思った。



〔人権展 展示書籍目録

1983. 10. 27~11. 10〕

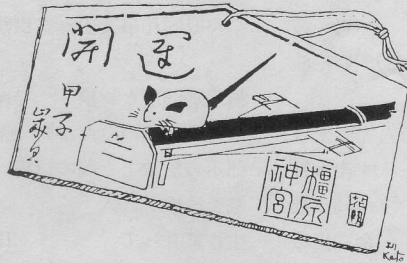
- 日本国憲法 (写楽ブックス) 小学館
 世界人権宣言 イーデス・ハンソン, 武者小路公秀
 (岩波ブックレット No.13) 岩波
 国際連合と人権 金東勲訳 部落解放研究所
 国際人権規約と人間解放 和島岩吉編
 (部落解放新書 4) 解放出版社
 人種とは何か (岩波新書 658) 岩波
 人種の差別と偏見 (" 830) 岩波
 差別、その根源を問う 上・下 野間宏(等)朝日新聞社
 民族解放運動(AA双書) 岡倉古志郎 頸草書房
 アメリカ黒人の歴史 本田創造(岩波新書 352) 岩波
 奴隷とは J. Lester, 木島始, 黄寅秀訳
 (岩波新書 757) 岩波
 アメリカ南部の旅 猿谷要(岩波新書・黄78) 岩波
 人種差別の神話 L. Bloom, 今野敏彦 新泉社
 あるユダヤ人の肖像 A. Memmi, 菊地昌実
 白井成雄 法政大学出版局
 ユダヤ人はなぜ殺されたか 1. 2 L. Dawidwicz
 大谷堅志郎訳 サイマル出版会
 夜と霧 (フランク著作集1) 霜山徳爾 みすず
 アウシュヴィッツと私 早乙女勝元 草土文化
 恐ろしい本(ちくま少年図書館2)
 長谷川四郎 筑摩書房
 非ユダヤ的ユダヤ人 I. Deutscher, 鈴木一郎訳
 (岩波新書 752) 岩波
 ホロコースト 上・下 G. Grren, 上村保男訳
 パシフィカ
 アンネの日記 A. Frank, 皆藤幸蔵訳 文芸春秋
 アンネの青春ノート A. Frank, 木島和子訳 小学館
 あるインディアンの自伝 P. Radin, 皆川季子訳
 思索社
 アジアの聖と賤 野間宏, 沖浦和光 人文書院
 無告の民・カンボジアの証言 大石芳野 岩波
 ベトナム帰還兵の証言 陸井三郎訳
 (岩波新書 864) 岩波
 香港の水上居民 可見弘明(岩波新書 702) 岩波
- 日本文化と朝鮮(1.2) 朝鮮文化社編 新人物往来社
 日本の中の朝鮮(シリーズ・日本と朝鮮) 太平出版社
 在日朝鮮人の諸問題 佐藤勝己編 同成社
 朝鮮人の光と影 呉 林俊 合同出版
 日本統治下の朝鮮 山辺健太郎(岩波新書 776)
 岩波
- 朝鮮人女工のうた 金賛汀(岩波新書・黄200) 岩波
 ぼくは12歳 高史朗・岡百合子編 筑摩書房
 沖縄の解放と教育 (双書部落解放5) 明治図書
 琉球学の視角 小島瓊礼 柏書房
 土の笑い、オキナワへ、オキナワから、金城実 筑摩書房
 いくさ世を生きて 真尾悦子 筑摩書房
 沖縄問題二十年 中野好夫・新崎盛輝
 (岩波新書 562) 岩波
 沖縄のこころ 大田昌秀(岩波新書 831) 岩波
 沖縄戦後史 中野好夫・新崎盛輝(岩波新書 981)
 岩波
- 部落問題・水平社運動資料集成1~3 三一書房
 被差別部落の形成と展開 三好昭一郎 柏書房
 部落解放運動の史的展開 新藤東洋男 柏書房
 部落の歴史と解放運動 部落問題研究所編・発行
 未開放部落の史的研究 渡辺 広 吉川弘文館
 同和教育の研究 小川太郎 部落問題研究出版
 人権の歴史 小林 茂編 山川出版社
 人身売買 牧 英正(岩波新書 801) 岩波
 入門部落の歴史 原田伴彦 部落開放研究所
 やさしい部落の歴史 部落問題研究所編・発行
 やさしい部落問題 東上高志 部落問題研究所
 近代日本と部落問題 部落問題研究所
 現代部落問題研究 藤谷俊雄 部落問題研究所
 人権(明治図書選書21) 平野一郎 明治図書
 部落史を歩く:ルポ東北・北陸の被差別部落
 本田 豊 柏書房
 君よ太陽に語れ 西日本新聞社人権取材班
 西日本新聞社
 水平社運動の思い出 上・下 木村京太郎
 部落問題研究所
 みんな同じ人間なのだ 奈良県同和教育研究会編発行
 奈良県同和事業史 奈良県同和事業史編纂委員会
 奈良県
 被差別部落と一揆 東 義和 明石書店
 被差別部落のたたかい 土方 鉄 新泉社
 部落の解放と人間の復権 上田卓三 明治図書
 乱一揆 非人 岡本良一 柏書房
 生きて斗って 田宮 武 解放出版社
 知りたがらない日本人 M. J. Barbot 柏書房
 企業と部落問題学習 部落解放研究所 解放出版社

「同和」教育論ノート 元木健, 村越末男 解放出版社
 こんな差別が (ちくま少年図書館48) 筑摩書房
 私たちの部落問題 部落解放研究所編・発行
 いばらの冠 部落差別問題委員会 新教出版社
 ある被差別部落の歴史 盛田嘉徳(等) 岩波
 (岩波新書 黄98)
 部落差別 サンケイ新聞大阪本社社会部編
 (部落解放新書7) 解放出版社
 荆冠の叫び 西口敏夫(部落解放新書9) 解放出版社
 新版差別 東上高志 三一書房
 狭山差別裁判 朝田善之助 部落解放同盟中央出版局
 狭山事件考 土方 鉄 創樹社
 狭山裁判 上・下 野間 宏(岩波新書968a,b) 岩波
 狭山裁判と科学 武谷三男(教養文庫938B) 社会思想社
 ドキュメント狭山事件 佐木隆三 文芸春秋
 峠の道 西門民江 草土文化
 被差別部落の世間ばなし 小林初枝 筑摩書房
 破 戒 島崎藤村 新潮社
 橋のない川 1~6 住井すゑ 新潮社
 橋のない川・上映運動の記録 部落問題研究所編発行
 ひとりひとりの願いを 人権作文 22 奈良県高等学校同和教育研究会編・発行

はじめての手話 田上隆司(等) 日本放送出版
 ある盲学校教師の三十年 鈴木栄助
 (岩波新書 黄51) 岩波
 偏見と差別ヒロシマそして被爆朝鮮人 平岡敬 未来社
 わが死民・水俣病斗争 石牟礼道子 現代評論社
 水俣病 原田正純(岩波新書 841) 岩波
 辛酸・田中正造と足尾鋇毒事件 城山三郎 角川書店
 おんなの歴史 上・下 もろさわようこ 未来社
 婦人論 上・下 A. Beble 草間平作訳 岩波
 恋愛と結婚 上・下 E. Key 小野寺信・百合子訳 岩波
 妻は囚われているか H. Gavron
 (岩波新書 768) 岩波
 女性解放の歩み 水田球枝(岩波新書 871) 岩波
 フランス革命期の女たち 上・下
 Gariina Serebriakoba 西本昭治訳
 (岩波新書 877,878) 岩波
 女と自由と愛 松田道雄(岩波新書 黄74) 岩波
 男性と女性 M. Mead 東京創元社
 最後の植民地 B. Grouit 有吉佐和子訳 新潮社
 日本の婦人問題 村上信孝(岩波新書 黄62) 岩波

障害者の解放運動 津田道夫(等) 三一書房
 言葉をそだて、ひとを育てる 黒藪次男・豊子 民衆社
 もう手足がなくなつて M.Wallace and M.Rabson 日本教文社
 谷口雅宣 日本教文社
 わたしたちのトビウス Cecilia Svedberg 偕成社
 山内清子訳
 NHKテレビろう学校 松崎節女 日本放送出版
 手話の世界 田上隆司(等) 日本放送出版

宗教と部落差別 仲尾俊博 柏書房
 一向一揆(日本歴史新書)笠原一男 至文堂
 背教者の系譜 (岩波新書 862) 武田清子 岩波
 二つのイスラーム社会 C. Geerts 林 武
 (岩波新書 874) 岩波
 宗教弾圧を語る 小池健治(等)(岩波新書 黄61) 岩波
 別冊陽気世界への歩み 天理教同和推進委員会編発行
 かあさんは魔女じゃない L. E. Andersen 偕成社
 背教者ユリアヌス 辻 邦生 中央公論



(岡登貞治編著「十二支の文様」から)